



題字 井口 文章
再刊 第310号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2019

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面…生徒会選挙立候補者にインタビュー
合唱祭、全クラスの合唱曲決まる
二面…取材で発見！隠れざる佐賀の魅力
肥前の歴史に思いを馳せて

錦城の未来を拓く候補者たち

副会長は決選投票に

11月6日(水)の6時間目、新生徒会役員候補による立会演説会と生徒会選挙が行われる。その選挙に出馬する立候補者6名が確定した。今号では、その6名にそれぞれの公約や、理想の錦城高校像などについて、インタビューを行った。

生徒会長候補

橋本太朗くん(2A)
生徒会長に立候補したのは橋本くん。出馬した理由を聞くと「この1年、生徒会副会長として活動して色々な問題が判明しました。ここでやめるのではなく、引き続き問題解決に取り組みたいと思ったからです」と話した。



生徒会副会長候補

中村心咲さん(1H)
生徒会副会長に立候補したのは、中村さん。現在の委員会にも所属していない。「錦城での3年間を楽しく濃いものにしたいと、立候補しました」と語る。



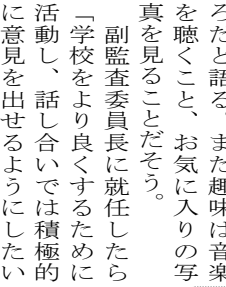
生徒会副会長候補

木村征太郎くん(1K)
「生徒会には自分の行動力を活かせる場だと思います」と生徒会の活動に意欲を見せるのは木村くん。立候補した理由は、今の生徒会長であり、同じダンス部の先輩でもある松本千冬くん(3B)に憧れたことだという。松本くんの勉



監査委員長候補

岡崎翔也くん(2B)
監査委員長に立候補するのは、現在の監査副委員長を務める岡崎くん。1年間活動し



監査副委員長候補

大久保麻美さん(1A)
「錦城に入って、この学校を良くしたいと思いました」と話す大久保さん。役員に立候補するのは初めてだという。中学時代は自分を変えたいため立候補を決意した。



選挙は明日
候補者の
意見表明を読み、
把握したうえで
投票を

合唱祭 各クラスの披露曲決定!

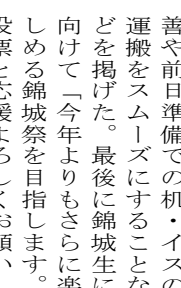
順番	クラス	曲
1	1-G	なんでもないや
2	1-J	僕が守る
3	1-F	愛にできることはまだあるかい
4	1-L	RAIN
5	1-K	パプリカ
6	1-C	3月9日
7	1-H	スパークル
8	1-B	虹
9	1-I	明日へ
10	1-D	プレゼント
11	1-E	ひまわりの約束
12	1-A	宿命
13	2-J	風になる
14	2-A	言葉にすれば
15	2-K	心の瞳
16	2-B	証
17	2-G	Pretender
18	2-C	今咲き誇る花たちよ
19	2-H	奏
20	2-I	ぼくのこと
21	2-L	正解
22	2-M	ヒカリ
23	2-E	青い鳥
24	2-D	友
25	2-F	青いペンチ

開催場所を立川にある「たましんRISURUホール」にすることが決定し、合唱祭実行委員会も本格的に動き始めた。10月29日(火)に行われた合唱祭実行委員会では、合唱の評価の付け方が技術点20点、表現点40点、感動点20点となり、点数基準が曖昧だった感動点の点数配分が40点下がるのが可決。合唱祭実行委員長の細川遥菜さん(2G)は、「書道クラス、美術クラスを含め、錦城生全員が活躍できる合唱祭を目指したいです」と話した。(雀)



錦城祭実行委員長候補

渡邊沙羅さん(1D)
今年の錦城祭に本部として携わった渡邊さん。その経験を通して「錦城祭を細部までこだわった行事にしたい」と



今年の生徒会選挙は、2年ぶりとなる決選投票も行われる。人の意見に流されることなく、自分の意志で真剣に考えて投票しよう。



見て・触れる 日本の最新技術 編集委員が文化プログラムに参加

10月26日(土)、東京・有明のMEGA WEBで文化プログラム取材会が行われ、編集委員4名が参加した。2020年東京オリンピックの機運醸成のための特別企画「FUTURE EXPO」を他校の中高生とともに取材し、近未来の技術に触れた。「FUTURE EXPO」とは、トヨタやパナソニックなどのオリンピック・パラリンピック公式スポンサー企業各社が、2020年を前に未来のモビリティや環境に配慮したエネルギーなどをテーマにして最新技術を紹介するものだ。



環境にやさしい最新の水素自動車
まず向かったのは水素エネルギーのエリア。空気から水素を取り、その水素を使用して動く自動車やロケットが展示されていた。オリンピック・パラリンピックに関する展示では、2020年の活躍が期待されているAI警備員や、目の前で試合が行われているかのような臨場感を味わえる3D中継技術などを間近で体験することができた。また、自動運転バスにも試乗。実際に体験した編集委員の1人は「乗り心地は思ったよりも普通の車と変わりませんでした」と感想を話す。

このイベントの開催に携わり、今回の取材会で案内役を務めた村井典昭さん(オリンピック・パラリンピック等経済協会の事務局員、トヨタ自動車株式会社社員)は「社会では戦えぬほど次が現れます。その戦いを勝ち抜いてきた者のみがこのFUTURE EXPOという場に来ることができるのです。この展示で『大人楽しいだろ』ということを中高生に感じてほしいです」と語る。また、取材会を開催した文化プログラムプレッセンターの小池真一さんは「今回の取材を通して自身が感じたまま、来るかもしれない未来の最新技術を批評してほしいです」と話した。(終)

※文化プログラムとは、五輪に向けた文化復興活動のこと。
五輪開催国では準備の4年間、様々な文化活動を推進することがIOCによって義務付けられている。

むらさき草

今年の1月に世界的に著名なストリートアーティスト、バンクシーの作品と思われる、風船を持ったネズミの絵が、東京都港区の防衛屋に描かれているのを見つけた。その絵から、バンクシーは何を考えたのか、何を私たちに日本人に伝えようとしたのか▼「ストリートアート」とは、街なかの建物に缶スプレーなどを用いて、絵や文字を描く黒人文化の一つのことだ。バンクシーの作品は、現代社会の政治や貧困問題を風刺するメッセージ性の強いものが多い▼先月、バンクシー研究の第一人者である、東京藝術大学大学院教授の毛利嘉孝教授の講演会に参加した。そこで毛利教授は、バンクシーの「アート作品は彼の生い立ちが深く関係している」と話した▼バンクシーの故郷、イギリスのブリストルは18世紀に黒人奴隷が運ばれてきた港町。彼らが伝えた黒人文化の影響を受け、町にはストリートアートが溢れている。貧困層が多い地域でもあり、彼も社会的弱者として青年時代を過ごしてきた者であるそうだが▼その話を聞いて、バンクシーの作品には、彼自身の体験から生まれた現代社会への批判意識や、誰もが平等に政治や社会問題の発言力を持つべき社会の実現という、未来への希望が込められていると感じた。ストリートアートは彼にとつて一番の「表現の場」であり「希望のパレット」なのだろう▼真贋かどうかも含めて、世間を賑わせた風船を持ったネズミの絵。ネズミは都市の邪魔者として敬遠されがちな生き物である。絵が本人のものならば、東京に現れたバンクシーは、都市の中で邪魔者扱いされているネズミに自分を重ね合わせたのではないだろうか▼遠い海を越えて日本に現れた「風刺アーティスト」バンクシー。有名なオークションシレッダー事件も含めて、彼の他の作品もぜひ見て欲しい。そこからあなたは何を感ずるか。(鶯)

大会報告

バドミントン部
10月20日(日)
▽東京都高等学校バドミントン新人戦1部大会兼関東選抜大会都予選大会
シングルベスト16
大川あかり(2H)

大会報告は職員室前カウンターにあるBOX、またはお近くの編集委員へ

生徒会動静

10.16~11.5

10月28日(月) 選挙管理委員会
10月29日(火) 合唱祭実行委員会
10月30日(水) 体育学芸委員会
代議員会



さが総文特集 第2弾

日本の近代化は佐賀から始まった

佐賀の魅力を再発見!

10月17日(木)に「都道府県魅力度ランキング2019」が発表され、全国高等学校総合文化祭が行われた佐賀県は46位という結果だった。しかし佐賀には見所が沢山ある。8月に佐賀を訪れた編集委員が、佐賀藩第10代藩主で佐賀藩の近代化を推し進めた鍋島直正にスポットを当てて、佐賀の歴史を紹介する。これを機に佐賀に興味を持ってほしい。(松・蓮)

鍋島直正を訪ねて

鍋島直正について知るべく、県立佐賀城本丸歴史館を訪れた編集委員。ボランティアガイドの吉岡邦彦さん(詳しくは「佐賀の魅力」を伝え続けて15年)参照より、佐賀藩第10代藩主鍋島直正について説明していただいた。

第10代藩主鍋島直正の誕生
1830年、鍋島直正は17歳(満15歳)で佐賀藩第10代藩主となるが、父親の贅沢な生活によって膨れた借金返済が先決とされる。直正公は磁器や茶の交易を



佐賀城について説明を受ける編集委員とガイドの吉岡さん

発展させるとともに、420人いた役人を5分の1にして歳出を減らしたという。その政策は「そぼん大名」の異名を生み出すほどだった。

教育改革

教育面では、藩校「弘道館」を移転・拡充し、予算も増やされた。建物はずり取り壊され跡地に記念碑が建てられている。吉岡さんは「徹底した教育改革によって優秀な人材を育成し、家柄にとられずに有能な者を積極的に採用したんです」と説明した。

対ヨーロッパ政策

「対外政策は最も偉大な功績と言えま」と吉岡さん。アヘン戦争で、産業革命で発展が進んだイギリスが清に勝利。直正公は「佐賀藩もヨーロッパの植民地にされる」と悟り、佐賀藩独自にさらなる富国強兵を進めることを決意する。長崎の警備強化と西洋の軍事技術の導入をはかり、反射炉などの科学技術を導入した。またアームストロング砲などの西洋式大砲や鉄砲の製造に成功した他、蒸気船を完成させ、基地として三重津

佐賀の魅力を伝え続けて15年

佐賀城本丸歴史館の魅力のひとつは、無料でガイドさんに説明してもらいながら見学できること。今回ガイドを担当して頂いた吉岡邦彦さんに話を聞いた。

吉岡さんは現在85歳で、15年前からガイドを務めている。5年ほど前から中国、台湾、韓国からの観光客が多く、現在は日本人が4割外



「お客さんが来てくれることが一番嬉しいです」

が、それ以外の、その面白さを「歴史は追及していると終わりがない」と話した。

海軍所を設置。このような政策で佐賀藩の軍備力を日本一に押し上げた。

民衆からの信頼

直正公が長期間指揮を執り続けられた理由を吉岡さんは「藩民からの信頼が厚かったためです。直正公は藩民の生活が苦しいときは税金を安くする政策も行いました。常に藩民に目を向ける姿勢は、本藩の政治家です」と語る。直正公は30歳で第一線で活躍すること30年。48歳で隠居し、58歳で病死した。

佐賀城本丸歴史館

佐賀城の敷地にはかつて天守閣、本丸、二の丸、三の丸が建ち並び、広さは30ヘクタールあった。跡地は佐賀城公園として整備されている。直正公が藩主のときに佐賀城本丸を新築。この建物は明治時代も、裁判所や学校として利用された。現在は木造の一部復元され、県立佐賀城本丸歴史館として公開されており、10月7日には来館者数350万人を突破した。また、現存している国の重要文化財、鯨の門・続櫓も建築された。



鯨の門・続櫓には当時の銃弾跡が残っている

100年の歴史がある図書館

佐賀藩について調べるため、佐賀県立図書館を訪れた。この図書館は大正2年に鍋島家が建設し、図書館として開館したものだ。その後、昭和4年に鍋島家より佐賀県に移管され、県立図書館となった。平成26年1月25日には開館100周年記念イベントも実施されている。現在の蔵書は約82万冊。館内には佐賀に関する本のコーナーが設置されており、佐賀についてすぐ簡単に調べることができる。大きな中庭から日が差し込み、明るい図書館内では多くの人が読書や勉強をしていた。



募金で建てられた銅像

佐賀城跡の入口付近に建つ直正公銅像は、平成29年に再建されたばかりの銅像だ。直正公生誕200年を機に、募金で再建された。銅像は西向きに建てられており、これは直正公が警備に最も心をかけた長崎港方面であり、遠くはヨーロッパの方向であること由来する。また、直正公の隠居地である旧三の丸方向であるとともに佐賀城跡を訪れる来客を歓迎する意味も込められている。



100名城が載ったガイドブックを手に笑顔

「佐賀城跡は一度来てみたかったので嬉しいです」と話してくれた。

博愛に満ちた佐野常民

鍋島直正と共に三重津海軍所の創設に尽力した佐野常民。彼は医学、理化学研究など多方面で才能を発揮し、日本赤十字社の前身である「博愛社」を創設した。海軍所跡に隣接する佐野常民記念館で、彼の生涯について聞いた。



佐野常民像

赤十字の出会い

1867年、西洋を調査するために訪れたパリ万博で、常民は敵味方別無く救護するという理念の赤十字に出会った。これからの日本には救護団などの人道的なことが必要だと感じた常民は政府軍へ「博愛社」設立の請願書を書くが、却下されてしまった。しかし「佐野さんの凄かった所はそこです。常民が熊本まで行って直談判すると、その熱心な様子から即日許可が下りたそうです。1887年に博愛社は日本赤十字社と名前を改称し、現在に至っています。



「ガイドは人の輪が広がっていく仕事です」

直正の三重津海軍所

欧米列強に対抗するため、佐賀藩が力を入れた軍事力強化。鍋島直正も携わった幕末佐賀藩海軍の拠点「三重津海軍所跡」を訪れ、三重津海軍所跡と佐野常民記念館と「歴史ガイド」として働く山口智世さんに案内してもらった。

見えない世界遺産 三重津海軍所跡

1858年、佐賀藩は長崎海軍伝習所を学んだことを藩内に広めるため、御船屋があった三重津に御船手稽古所を設けた。これが三重津海軍所の始まりとされている。三重津海軍所は、洋式船の運用技術や知識を教育する舟屋地区、大砲や銃の訓練や海軍教育を行う稽古場地区、洋式船の部品の修理と製造、修船



発掘調査で確認されたドックの復元模型

を行う修繕場地区の3つの地区が約600メートルにわたって広がっていた。現在、この付近一帯は、佐野常民記念館と歴史公園からなる佐野記念公園として整備されている。ドックとは船をつくらたり修理したりする施設のこと。

沿岸に掘られたドックは満潮時に船を入れ、潮が引くことで自然にドック内の海水が排水されるという仕組みだ。修繕場地区に設置されていた三重津のドックは、日本一とも言われる有明海の潮の干満差が利用されていた。

ドックは4段の木組みで深さは4.5メートル、全長約60メートル。これは佐賀藩が訓練に使用するためにオランダから購入した洋式軍艦、電流丸が十分に入る大きさだ。また、西洋のドックは主に石やレンガを材料に造られているが、三重津海軍所のドックは木や土が用いられているという。山口さんは「有明海は地盤がドロドロしていて石やレンガは向かないからです」と理由を話した。

現在、ドックは風化を防ぐために地中に埋められている。三重津のドックは、洋式船の修理用ドックとしては現存する日本最古のもの。他にも地盤を固くするために貝殻を敷き詰めて叩いて押し固めていた跡も見つかっている。山口さん、そして三重津海軍所跡は、日本が西洋の船舶技術の導入を行い、近代化を目指した過程を知る上での貴重な遺跡として評価され、2015年に世界遺産に登録された。



VRスコープを使って160年前の海軍所と現在の姿を見比べながら、大砲での訓練や電流丸の甲板の様子、ドックの大きさを体感することができました。

今回佐賀県を訪れて、日本の近代化の先駆者である佐賀藩の歴史を詳しく学ぶことができた。ここで得た知識をこれからの社会の授業などに活かしていきたい。